

---

# 真弓

三島和人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真弓

### 【コード】

N9103D

### 【作者名】

三島和人

### 【あらすじ】

真弓と将弘のアホアホ料理対決。それしか言えない。お遊びで書いた作品です。期待しないでください（笑）

(前書き)

黒歴史

そう、私に、できないはずがない。

ある日の昼のこと。

いつものように男二人でむなしく昼飯を食べていた将弘まさひろとその友人である圭介けいすけのもとに、将弘の幼なじみ的な存在である真弓まゆみが近づいてきた。

「さあ、勝負よ！」

「またですかい」

自称パーフェクトな女、真弓が将弘に勝てないものの一つが料理だった。あとは身長など、男女差でうまれるものなので、それだけはどうしようもない。残りで唯一努力で勝てる料理で将弘を負かすことが、真弓の目標であり、最後の難関だった。

たまに行われる審査員がクラスメイト全員（将弘と真弓を除いて3人）の料理対決では、いつも将弘が勝利している。過去に6回行われたが、その結果は30 - 4、26 - 8、27 - 7、23 - 11、19 - 15、25 - 9。

その7回目の開催が、宣言されているようだ。

「今度は前のようにはいかないわ」

ちなみに、真弓がこのセリフを言うのは、料理では6回目。

「そういつて勝てたためしはないだろう……いや、あるのか」

将弘にとっても、なぜかいままで負けてきたいろいろな競技（？）。

最後の砦である料理を譲ったら、男の威厳はもうない。

料理で男の威厳というのは、いささか違和感があるが。

「いいから、明日作ってくること。ジャンルはいままでと同じ、卵焼き！」

「はあ、はいはい、じゃあ明日な」

真弓が自分の席に戻る。

その瞬間、となりで傍観していた圭介が叫んだ。

「第漆回！ 将弘VS真弓 THE Cooking BATTLE！ 期日は明日！ 種目は卵焼き！ 野郎ども、心してかかりやあああー！！！」

「くくくくうおおおおおお！」

そして教室全体が揺れたんじゃないかと思うほどのそこにいたクラスメイト全員のおたけび。野郎どもと言われたのに、女もまったく気にもせずに叫ぶ始末。このクラスはまったくもってお祭り好きであった。

その夜。将弘宅にはキッチンで鼻歌を歌いながら卵焼きを作る将弘の姿。

同じ夜。真弓宅にはキッチンで気合を入れながら卵を割っている真弓の姿。

そのまた同じ夜、明日への興奮で夜も眠れるクラスメイトたちの姿。眠れぬでなく、眠れるである。やはり、体力の回復は大切である。

来る翌日、朝。

登校時間は8時半なのに、7時半には全員がクラスに揃っていた。いうまでもなく、全員朝食は抜いてきている。

中には夕飯まで抜いてきているやつもいる。この小さな対決に、どうしてそこまでの大きな根性をかけようか。根性をかけすぎて、夜は寝ていたようだが。とにかく、そのゴングは鳴ろうとしていた。

「青コーナー。これだけは譲れぬ、男の象徴！ まーさーひーろー」

「！」

「「「「うおおおおおお！」「」「」

「赤コーナ―。自称パーフェクトの意地なのか！ まーゆーみー！」

「「「「うおおおおおお！」「」「」

時空を震わすとどろき。市民のみなさん、迷惑極まりなく、とにかくくじめんなさい。

「ウウウラウンドオオオセブン！ 開始！」

圭介のやけに舌をまいた声とともに、人数分（自分と相手を含めた、36人分）の卵焼きを用意してきた将弘と真弓は、圭介がもってきた紙皿（72枚）にそれぞれ配っていく。それらをクラスメイトたちは食べていく。なんだか異様な光景が広がっている朝である。

クラスメイト全員が食べ終わると、それぞれが白い紙にどちらがよかったかを書いていく。無記名だ。

それが終わったあと、将弘と真弓がそれぞれ自分と相手のものを食べ比べて、一喜一憂したところで、開票していく。

1 枚目、将弘。 1 - 0。

2 枚目、真弓。 1 - 1。

3 枚目、将弘。 2 - 1。

4 枚目、  
。

それを圭介が黒板に正の字を書いて集計していく。  
緊張が走る中、事態は終盤に突入し、

29枚目、将弘。将弘16 - 真弓13。  
30枚目、将弘。将弘17 - 真弓13。

人数は34人。これで将弘にあと一票が入ると真弓の負けが決定に  
。

31枚目、真弓。将弘17 - 真弓14。  
32枚目、真弓。将弘17 - 真弓15。  
33枚目、真弓。将弘17 - 真弓16。  
34枚目、真弓。将弘17 - 真弓17。

ん？

「「「「うおおおおおお！」「」「」

1999年7月に来ると言われていたノストラダムスの大予言が、  
時期を外して今来たんじゃないかと思われるくらい、地面を揺らす  
轟音。もとい、声。

まさかの同点。

人数が偶数のため、いつかはあるんじゃないかと言われて、いまま  
でなかった結果。

「「「「うおおおおおお！」「」「」  
「「「「うおおおおおお！」「」「」  
「「「「うおおおおおお！」「」「」

いや、本当に人類が滅びてしまうのでやめていただきたい。

「「「うおおおおおお！」「」」

「静粛に！」

いつのまにかマイクを持っていた圭介が叫ぶ。  
するととたんに静まり返るクラス。

「第漆回！ 将弘VS真弓 THE COOKING BATTLE  
E！ 結果は同点！ では、危なかつた将弘さん、感想を一言」  
クラス全体がその歴史的瞬間の言葉を待つ。

「あー、あの、えーっ、同点とのことですが、個人的には真弓の方が上だったので真弓の勝ちでいいんじゃないかと」

「「「うおおおおおお！」「」」

「静粛に！！ それは敗北宣言とみていいんでしょうか？ 将弘さん？」

「はい」

「冗談じゃないわよ！」

突然の真弓の声。

「「「うおおおおおお！」「」」

「うるさい！ 黙つとけ！ 水を差すな野郎ども！ ……どういふことですか、真弓さん」

「そんな冗談な結果が許されてたまるもんですか！ 将弘が私に入れるというなら、私は将弘にいれるわよ！」

「でも、お前、いいのか？」

と、青い精魂の将弘。

「何がよ？」

と、赤い闘魂の真弓。

「自分から勝利を棒に振って」

と、青い雑草の将弘。

「情けで勝たしてもらったようでないやじゃない」  
と、赤い芍薬の真弓。

「はいはい」

と、何もおもいつかない 将弘。

とりあえず、事態が集約したところで、さきほどから何か赤いやら  
青いやら入れている圭介を殴っておく、真弓と将弘だった。

そう、私に、できないはずがない。

この料理勝負に勝ったときには、そのときは将弘に  
あれ、でもこれ勝ってもまだ卵焼きだけだよね？

先は長そうだ。

(後書き)

食べ物の話を書こうって企画が某所であったとき、思いついた内容をメモに書き残していました。後からメモを見直したら解読不能だったのですが、読み取れる部分から無理やり書き起こしたのがこの作品です。

その場のテンションで書き上げたので滅茶苦茶な上に、黒歴史認定せざるを得ない出来になっているわけですが……結末困って無理やり終わらせましたし。

まあ、古い作品ですし大目に見てやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9103d/>

---

真弓

2011年10月3日20時44分発行